

# インクルーシブな保育・教育に生かす身体表現遊び

大橋さつき

(大学教員)

私は、発達支援法である「ムーブメント教育」にダンスや創造的な要素を強化した身体表現遊びの実践を重ねてきました。この実践では、発達段階を考慮した運動遊びを軸に、遊具や音楽を活用しながら、集団による創造的な表現活動を楽しみます。地域の子育て支援や保育所・幼稚園・学校で、主に乳幼児や障がい児を対象に取り組んでいます。

活動が充実しているとき、「気になる子」が「気にならなくなる」ことがよくあります。そもそも、子どもたちの自由で豊かな身体表現が生まれる場合は、許容的にかつ活気に満ちた場です。子どもたちが安心して身体を投げ

出し、他者と交わることで、自分自身や仲間  
の個性を認めあうことができる場なのです。  
そして、活動から得た「一体感」や「通じあ  
える喜び」が、もつと「伝えたい」「かわり  
たい」というさらなる欲求を生むでしょう。  
さまざまな違いを包み込むインクルーシブな  
保育・教育を身体表現遊びの活動から始める  
メリットは、一人ひとりの身体、一人ひとり  
の表現を大切に受けとめ尊重する活動の中で、  
「みんなちがってみんないい」を実感できる  
ことにあります。そして同時に、表現を分か  
ちあい共有する体験を無理なく積み重ねるこ  
とで、「みんなと一緒にうれしい」と素直に感

大橋さつき（おおはし さつき）  
和光大学現代人間学部身体環境共生学科准教授。身体表現や創造的  
な遊び活動による子育て支援、障がい児支援を展開。著書に『発達  
障がい児の育成：支援とムーブメント教育』（共編著、大修館書店）他。

じることができるのです。

## まずは、「共に居る」ことから

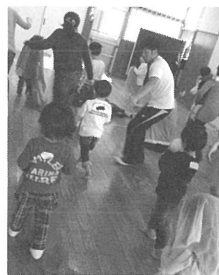
さまざまな刺激に過敏に反応してしまう子どもや、予測できない出来事に対して不安になってしまう傾向のある子どもは、集団に参加できないことが多くなります。そうした子どもたちには、受容的で安心感のある遊び環境を用意し、ただその場に「共に居る」状態を参加の第一段階として捉えてみるのが大切です。たとえ部屋の片隅に座っていても、離れた場所で動き回っていても、その子が集団の活動を見たり聞いたりして感じ取ることができる場に居たのなら、それだけで意味があると考えてみます。実際に、他の子の動きを見ているだけで新しい刺激を受けたり、保育者の優しい歌声で安心したり、豊かな身体表現を見て意欲を駆り立てられたりするように。集団が苦手な子どもを無理やりに参

加させるのではなく、少しずつでも自分からかわりたくなる魅力的な環境として遊びの場を提供することが重要になります。

## そーっと動きたくなる

「多動性」の傾向がある子どもは、絶えず動き回ったり大声を出したりして落ち着きがないと思われがちですが、自己の身体意識や周囲を取り巻く時間・空間の因果関係の意識などが弱いため、行動をコントロールする上でさまざまな困難が生じている場合があります。自己コントロールが苦手な子どもたちには、強制的に静かにさせるのではなく、身体を思いきり動かす遊びを十分に提供した上で、活動に「動」と「静」のアレンジを加え、注意と集中の拡散を図っていくとよいでしょう。

例えば、音が聞こえている間は激しく動き回って音が止まったら静止したり、布を大きく動かした後で一斉に止める動きを織り交ぜ



たりしてみます。また、身近な生き物や絵本の登場人物になりきることで「静」の動きの必然性を取り入れること

ができます。ある実践では、「お昼寝しているクマさんを起こさないように……」という設定を共有しただけで、じっとしていることが苦手な子どもを含めて、みんなでもとても静かにそーっと移動することができました。

### かかわりたいという欲求を育む

他者とのやりとりや社会性に課題がある場合は、子どもの実態を「固定的」に捉えてしまふと、社会適応に向けて、「特異」と見なされる部分だけを直接的に取り除くための対症療法的なアプローチや、できないことを繰り返し訓練するドリル的な指導に力点が置かれてしまうことがあります。しかし、社会的な

状況から切り離れた状態で社会性を形成しようとすることは、水の外で泳ぐ動作をさせながら泳ぎ方を教えるのと同じようなもので、コミュニケーションスキルを教えることだけに重点を置くと、スキルの獲得が最終的な目標になり、社会的な関係を築くことの重要性が薄れてしまうかもしれません。

身体表現遊びの活動は、相互的で相補的な他者関係の体験の積み重ねを通じたコミュニケーション支援を可能とします。子どもたちは、楽しい表現活動の中で、他者に作用したり、他者と合わせて動いたりする経験を通して、結果的に、やりとりの方法を理解したり、問題行動とされる行為パターンの修正を行ったりできるようになります。障がい児や気になる子どもが孤独感や疎外感を感じることもなく、自ら発信したコミュニケーション行為が他者から受容される経験を積み重ねることはとても重要です。他者とかかわることは楽し

いことなんだ、必要なことなんだという実感  
を深めていくことが、結果として、他者とか  
かわることへの「欲求」や「自信」を芽生え  
させ、将来に通じる社会適応力を高めていく  
ことになるでしょう。

### 自己決定・自己表現の力を育む

障がい児や気になる子どもは、集団生活の  
中で失敗経験を重ねてしまいがちで、しだい  
に意欲や自信をなくし、能力を発揮すること  
を怖がったり嫌がったりして指示待ちになる  
傾向が見られます。幼少期から、主体的に取  
り組み自ら判断する体験を積み、自己決定力  
を育んでいくことは必須であると考えます。

そのためには、答えが一つでない身体表現  
活動の要素を生かし、「別のやり方でやってご  
らん」「他にはどんな表現があるかな」などの  
言葉掛けによって、多様な表現を引き出す工  
夫が効果的です。例えば、音楽や模倣の要素

を活用してさまざまな「風」のイメージで動  
いた後に、「どんな風になるのか」自分で決め  
て動き、一人ひとりの表現を分かちあう活動  
は、自己決定や自己表現の力を育みます。

保育所・幼稚園における障がい児や気にな  
る子を対象とした実践においては、対象児の  
能力向上や問題行動の改善という側面だけで  
はなく、共同体としての集団やクラス全体の  
変容にも目を向ける必要があります。保育者  
には、その子どもを取り巻く環境として集団  
の関係性を見直す姿勢が求められるでしょう。  
とりわけ、子どもにとって最も影響力のある  
環境として保育者自身を捉える視点が重要で  
す。そして、身体表現活動の魅力―「みん  
なちがつてみんないい」と「みんなと一緒が  
うれしい」を体現する「モデル」であること  
を自覚し、自ら活動を楽しみながら、表現体  
として豊かであり続けてほしいと願います。